



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2017.4 第67号



提◆言

SPF豚の医療貢献

～これまでの50年で培われた強みを活かす～

日本SPF豚協会理事・全農畜産サービス(株)社長 種田 貴至^{あつよし}

初めまして、全農畜産サービス株式会社の種田です。昨年6月に現日本SPF豚協会会長である北島氏の後任社長となり、昨年から当協会の理事をやらせていただいております。私は、くみあい飼料会社の営業部署や全農の畜産生産振興部署および飼料畜産中央研究所を経て現在の職場に参りました。このため、豚に関しては特別詳しいわけではなく「なまくら」な人材です。

さて、当協会は本年10月で設立48周年になり、この間、我が国におけるSPF豚の認知度を高めるために先人諸先輩方が血のにじむ努力をされてきたことは想像に難くないところです。このような先人の方々のご努力が実り、今やSPF豚は医療分野でも注目されるものとなりつつあります。

前職場の全農飼料畜産中央研究所では、SPF豚を実験用として医科系大学や医療機器メーカー等に販売していました。このように食用を目的として飼育されてきた豚が実験用として使用される時には、「豚」ではなく、「ブタ」とカナ表記されます。したがって、これらのブタは実験動物の業界では「実験用家畜ブタ」と言われています。数年前、この仕事に初めて関わった時に、私は「実験用家畜豚」と表記し、ある営業マンから「あなたはシロートだ！実験用のブタは豚ではなくブタ！」と修正されたことを思い起こします。

日本実験動物協会ホームページの「実験動物総販売数調査」によれば、実験用ブタの使用は近年増加していることが窺われます。日本実験動物協会や日本実験動物技術者協会がブタを専門とする研修会を開催してきた努力等により、着実にその使用頭数を増やしています。その結果、今年5月25日から27日に福島県郡山市で開催される日本実験動物学会総会では、実験用ブタに関するプログラムがかなり盛り込まれています。

ミニブタは初めから実験用途として生産され使用されます。ミニブタの清浄性は極めて高く、遺伝的均一性や生化学的データの豊富さ、なおかつ長期飼育しても家畜ブタのようには大きくならないため、医薬品開発における安全性試験など精密なデータが求められる試験での使用が主となっています。

一方、実験用家畜ブタは、ミニブタに比べて頭数の確保が容易なため、多頭数を必要とする医療用手技や実験等に向いているという特長があります。

SPF豚は通常のコンベンショナルの豚よりも衛生レベルが高いという長所を有しています。このため、実験用家畜ブタを購入する現場では、日本SPF豚協会の「認定証」を有するSPF豚を求められる顧客も多いようです。

さて、近年動物福祉に関する規制は年々厳しくなっており、「動物の愛護及び管理に関する法律」に基づき、「産業動物の飼養及び保管に関する基準(平成25年改正)」が制定されています。これに基づき平成28年9月には畜産技術協会が「アニマルウェルフェアに対応した豚の飼養管理指針」をとりまとめました。実験用家畜ブタに関わる機関は、このような関係法令・基準を順守することが大切であると考えます。

医療・医療機器分野の技術革新は日進月歩です。今やSPF豚は我が国の食肉産業への貢献とともに、これらの分野への貢献をも求められています。高品質な豚肉を生産してきたSPF豚の飼養管理技術が医療分野においても花開きつつあります。新たな使命ですので集団でのパワーが求められます。今後、日本SPF豚協会という組織でこれらの使命に対してどのような取り組みが出来るのかを協会の皆さんと考えていきたいと思っています。